

1. 登山記録

K 2 西稜から未踏の西壁へ

田 辺 治

日本山岳会東海支部では、新ルートからK 2へ登ることを目標に、1994年から研究を行なってきた。その結果、1981年早稲田大学隊の西稜ルートを標高7,800mまでたどり、ここから左上して約8,000m地点で西壁に回り込むことにした。この回り込む地点の突破が最大のポイントと思われた。西壁上部に入れば雪壁から雪壁をつないで、山頂直下で北稜に出られそうだ。新ルートとなる部分は、7,800mより上部、標高差にして約800mである。ルートの困難度と隊の実力を考え、タクティクスは古典的であるが、固定ロープ、酸素、シェルパを使った極地法をとった。

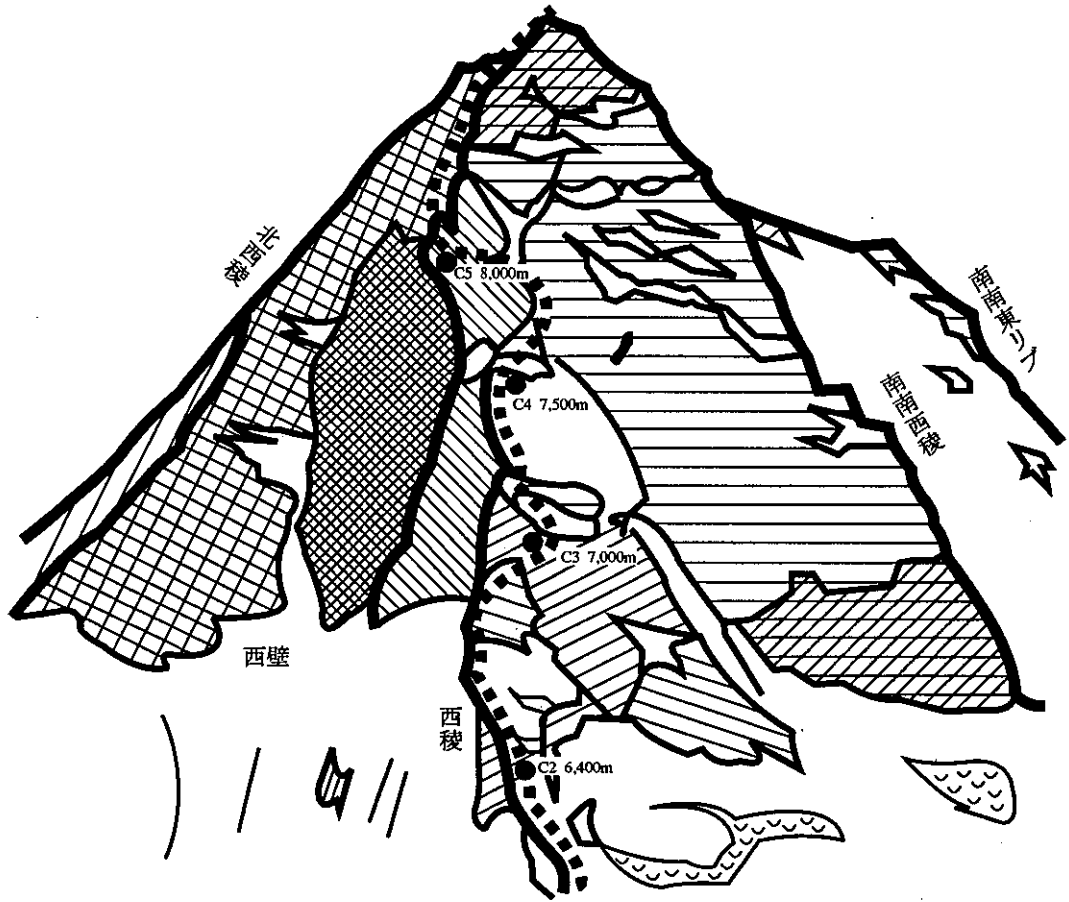
ところが、出発を10日後にひかえた5月5日、徳島和男隊長が穂高岳涸沢で雪崩に巻き込まれ死亡してしまった。そのため急遽田辺が隊長を務めることになった。

登山隊は5月16日、日本を出発し、6月4日、トンガルよりキャラバンをスタートした。途中、パイクにて、ヒマラヤングリーンクラブの植林活動を手伝った。ベースキャンプは、サボイア氷河の標高5,500mの地点に設ける予定であったが、ポータートラブルのため、6月10日K 2ノーマルルートのベースキャンプ地点5,150mに建設した。一方学術隊は、バルトロ地域の環境調査のため、水、空気、木の年輪などの採取を行なった。

登山は5,500m地点をABCとして、6月14日よりルート工作を始めた。しかし静岡ブロードピーク登山隊で、6月16日雪崩による遭難事故が発生し、救助の要請を受けて登山活動を一時中断した。そして18日、全員で捜索にあたった結果、2遺体を発見し収容することが出来た。

6月20日より登山活動を再開したが、6月中は悪天が続き、一進一退であった。しかし7月に入ると、バルトロ山城は20年ぶりという晴天に恵まれ、急ピッチでルートがのびた。7,800m地点まで、早稲田の西稜ルートをたどったが、6,900m地点の岩壁帯は、荷上げのしやすさを考え、少し右手にルートを変えた。7月16日、「滝部」の幅50cmもないトンネルのような狭いルンゼを突破した。ここから先が未知の世界となる。広島三朗氏から譲り受けた航空写真と照らし合わせ、左へ左へとルートのをのびした。西稜ピナクル群の肩の8,000m地点に絶好のテントサイトを発見し、C 5とした。肩からは懸垂下降2ピッチで西壁側の雪壁に降りることが出来た。

7月18日、田辺、鈴木、中川の一次アタック隊は、C 5を建設し、19日頂上アタックにでた。西壁は不安定な雪壁から雪壁をつないで左上し、8,400m付近で北西稜のコルにでた。このあたりは例年のK 2のように悪天が続いた場合は、雪崩のため非常に危険な登攀を強いられそうだ。コルからはガラ場を200mほど登って、北稜の最上部に達する。ここを慎重に1ピッチトラバースすると、こんもりとした雪のドームがあり、山頂はもう間近だった。こうして誰よりもここに立ちたかったであろう徳



K 2 西稜から西壁ルート図

島隊長と、ウルタルⅡ峰に逝った山崎彰人君の遺骨を山頂に安置することができた。

20日間続いた晴天もついに終わり、21日の二次アタックは悪天につかまって敗退した。しかし、28日、滝根、中島、山田、小林、ダワタシ、ギャルブー、ミンマ、ペンバドルジェの8名が二次アタックに成功し、今回のK 2登山の幕を閉じることができた。

今回私たちは、私たちに可能な方法で、ぎりぎり可能なルートに登ることが出来た。しかし、K 2西壁の真に困難な部分は、手付かずのまま残されている。将来西壁を下部から完登するクライマーが現われることを期待している。

(日本山岳会東海支部K 2学術登山隊1997隊長)